

ミストラのデスポテース国について

On the Despotate of Mistra

久志本 秀 夫

Summary

In parallel with the cultural revival in Italy which we call "Renaissance", there did exist another Renaissance in the decaying Byzantine Empire during the 14th and the 15th century. A. A. Vasiliev asserted this thesis in his "History of the Byzantine Empire", which was supported by O. Halecki and followed recently by S. Runciman's "The Last Byzantine Renaissance". One cultural center was Mistra on the outskirt of ancient Sparta. Curiously the city of Mistra was not founded by Greeks but by French crusaders who had invaded central and southern Greece after the Fourth Crusade. The origin of the Despotate is due to the Cantacuzenian family but after the acquisition by the Palaeogian dynasty Mistra became the home of Greek revival, leaving many monuments with very interesting frescoes.

1

1300年代に始まるイタリア文化の昂揚は、一般に「ルネサンス」とよばれているが、それが果して、ルネサンス＝再生とよんでいいものかどうか、西ヨーロッパには、それ以前、特に12世紀にもルネサンスがあったのではなかろうか、そもそもイタリア・ルネサンスというものは存在しなかったのではないか、などと議論百出して現在に至っている。しかしそれらは西欧世界に限って論じられたものであった。しかるに A. A. Vasiliev が新しい視点を導入するにいたって、問題は非常に新鮮な様相を呈したのである。彼によると、イタリア文化の開花が見られたのとほぼ同じ頃、ビュザンティオン帝国最末期のパライオロゴス朝においても目ざましい文化的発展があったとされる。

「イタリアもビュザンティオンも十字軍によって達成された経済的知的革命にもとづく共通の特色と共通の起源を有する激烈な文化活動の時代を生きていたのであった。これはイタリア・ルネサンス、あるいはビュザンティオン・ルネサンスの時代ではなく、ルネサンスという語を広義に用い、単一の民族に制限しなければ、ギリシア＝イタリア・ルネサンス、または南ヨーロッパ・ルネサンスの時代であった。」

ポーランド人史家 O. Halecki は Vasiliev の提言を支持して、次のように述べている。

「東ローマ帝国は、既にコンスタンティノープルを取り巻くアジア人の勢力に圧倒されていたので、政治的には、14世紀後半の出来事は、ヨーロッパのどの地よりも決定的ではなかった。しかし、ビュザンティオンは残存したわずかの領土しか保持しなかったのであるが、文化的にはルネサンスとよばれる新しい時代に入った。⁽⁴⁾」

そして Halecki は註釈において、この「いまだ十分に研究されていない課題に Vasiliev が重要な貢献をした」と述べている。その後、この分野の研究も進展し、1970年には S. Runciman⁽⁵⁾ の「最後のビュザンティオン・ルネサンス」と題された概論が刊行された。

ところで、ビュザンティオン・ルネサンスの中心であるが、一はいうまでもなくコンスタンティノープルである。カーリエ・ジャミとよばれたモスクは、もとキリスト教の修道院で、美しいモザイクとフレスコがビュザンティオン・ルネサンスの存在を例示している。⁽⁶⁾ いま一つの中心はスパルタ近傍のミストラであった。後述するように、ミストラの教会、修道院に現存するフレスコには、伝統的ビュザンティオン美術の作品もあるが、従来に見られぬ清新な作風をもつものがある。初期イタリア・ルネサンスとの関連性が問題とされるのも無理はない。また学問の上でも、哲学者プレートーンを中心に、自由な学風が展開された。それはあたかも、15世紀イタリアのウルビーノ、マントヴァ、リミニなどの地方都市文化を髣髴させるものがある。そこで、ミストラとデスポテース国の成立とを中心に、この興味ある文化事象について述べてみたい。

2

十字軍によるコンスタンティノープル占領は1204年4月13日のことであつた。⁽⁷⁾ ビュザンティオン帝国は一時消滅し、代ってラテン帝国が出現した。初代皇帝はフランドル伯バルドワン (Baldwin) である。モンフェラート辺境伯ボニファス (Boniface) は有力な皇帝候補者であつたが、結局テサロニカ王国を創設し、マケドニア、テッサリアを統治することになった。彼の麾下で、ペロポネネソス半島を攻略したのは、ギョーム・ドゥ・シャンプリット (Guillaume de Champlitte シャンパーニュ伯ユーグ1世の孫) とジョフロワ・ドゥ・ヴィルアルドゥアン (Geoffroy de Villehardouin 同名の「コンスタンティノープル征服記」の著者の甥) との二人である。⁽⁸⁾ 彼らの半島攻略は、急速に進んだ。1205年11月19日の教皇インノケンティウス3世の書簡には、ギョームが「全アカイア地方の君主」 (princeps totius Achaiae provinciae)⁽⁹⁾ とよばれている。その国は一般にアカイア公国、またはモレア公国として知られている西欧的封建国家である。⁽¹⁰⁾ 首府はモレア西北部のアンドラヴィダ (当時はフランス語読みアンドルヴィーユ Andreville) であつた。古代オリュンピアより西北へ約60キロ) にあつた。現在、ラテン

司教のいたゴシック様式の聖ソフィア教会が残っている。⁽¹¹⁾

モレアとは、はじめ古代エリス地方を意味したが、のちペロポネネース半島全体をさす語となった。最も古い例は、ブリティシュ・ミュージアム所蔵の1111年のギリシア語写本 (add. mss. 28, 816) に見られる。その語源についてはスラヴ語 *more* (海) に由来するという説もあるが、今日では、エリス地方に植えられていた桑の木 (*μωρέα*) より派生したというのが通説である。⁽¹²⁾ モレアに関連して一言しなければならないのは、いわゆる「モレア年代記」である。

これは十字軍士によるモレア征服の物語であり、特に表題はないが、一般に上記のように⁽¹³⁾ ばれている。現存しているのは、ギリシア語写本、フランス語写本、イタリア語写本、アラゴン語写本の4種である。⁽¹⁴⁾ すべて派生本で、原本が何語で書かれているかについて諸説がある。J. Schmitt は最良のギリシア語写本である Codex Havniensis 57 (コペンハーゲン大学図書館所蔵) と Codex Parisinus gr. 2898 とを対照し、註に Codex Taurinensis B II. I. との異同を入れて公刊した。⁽¹⁵⁾ ギリシア語写本は他に二つあるが (Codex Parisinus gr. 2753, Codex Bernensis gr. 509), いずれも上記パリ写本2898よりのコピーである。Schmitt は言語学的立場より、失われた原本はギリシア語で書かれていたとしている。⁽¹⁶⁾ J. Longnon は自分の編集したフランス語版序言で、原本はイタリア語またはヴェネツィ語であったと主張した。⁽¹⁷⁾ H. E. Lurrier はコペンハーゲン写本より英訳し、序論と註を付して刊行したが、諸説を比較しながら、⁽¹⁸⁾ フランス語原本説をとっている。いずれにしても、原本のことばの問題は決定的な解答が現われていない。

「モレア年代記」は中世末期のペロポネネース史の根本史料である。同時に征服者のラテン語、フランス語、イタリア語を吸収したギリシア俗語の資料でもある。歴史学と言語学の双方から貴重な記録といえよう。ギリシア語版の筆者は、ギリシア語とモレアの事情に通曉したフランス人であると考えられている。⁽¹⁹⁾

また、ゲーテの「ファウスト」第2部第3幕のギリシアの場面は、「モレア年代記」に示唆されたとする学者がかなり存在する。とりわけ J. Schmitt は、ミストラがその背景であった⁽²⁰⁾ としている。

3

アカイア公ギョーム・ドゥ・シャンブリットは相続問題でフランスへ帰ったが、1209年に亡くなる。モレアに残した彼の甥ユーグも程なく死に、ギョームの協力者ジョフロワ・ドゥ・ヴィルアルドゥアンが単独統治者となった。⁽²¹⁾ ジョフロワはモレアのほとんどを征服したが、西南

ミストラのデスポテース国について

端のモドンとコロンはヴェネツィア人、東⁽²³⁾南端のモネンヴァシアはギリシア人が確保していた。1228年頃、長子ジョフロワ2世があとを継ぎ、大むね平和が続いた。彼はギリシア人の2⁽²⁴⁾国、ニカエア帝国とエピロスのデスポテース国とは、つとめて衝突をさせた。ここで「デスポテース国」について触れておきたい。

デスポテース (δεσπότης) とは、古代ギリシアでは家の主人、特に奴隷との関連で用いられた。またギリシアの神々やオリエントの専制君主をも意味した。7世紀以降、ビュザンティオン帝国では皇帝の称号となったが、アレクシオス1世 (1081—1118) 以来、皇帝の子息、兄弟、女婿にデスポテースのタイトルが与えられ、皇帝につぐ高位の位階をあらわすようになった。⁽²⁵⁾ 13世紀以降は皇帝の縁者が地方を支配する際に用いた称号というのが通説であるが、近年、有力な反論があらわれて「デスポテース国」の存在が否定されている。⁽²⁶⁾

コンスタンティノープルの陥落後、ミカエル・ドゥカスがエピロスのアルタ (古代のアムブラキア。アムヴラキコス湾に注ぐアラクトス川の河口より北へ20キロ足らずの位置にある。この湾の西、地中海への出口にB.C.31年の海戦で有名なアクティウムがある) に樹立した国も、後述するミストラのデスポテースたちの国も、厳密に言えば「デスポテース国」ではない。しかし、コンスタンティノープルを首都とした国は「ローマ帝国」に他ならなかったのに、後世のひとが「東ローマ帝国」「ビュザンティオン帝国」「ギリシア帝国」などとよんでいるように、結果論的に「エピロスのデスポテース国」「ミストラのデスポテース国」と称してもさしつかえがないように思われるのである。

1246年ジョフロワ2世の弟ギョームが後を継いだ。彼は1211年、メッセニア湾北方の良港カラマタに生まれた。⁽²⁷⁾ ギリシア語をギリシア人のように話したという。ギョームは直ちにギリシア人最後の要衝モネンヴァシアの攻撃にとりかかった。モネンヴァシアはスパルタの東南約100キロ余りの位置で、東方エーゲ海に突き出た900フィートの絶壁の上に存在する。本土とは狭い地峡が通じているのみであるから、ほとんど島のような状態である。⁽²⁸⁾ 古代にはミノアとよばれていたが、中世初期のスラヴ人の侵入後はラコニアのギリシア人の逃避の地となった。起源をマウリキオス帝 (582—602) の時代にさかのぼらせる説もあるが、⁽²⁹⁾ ともかく「中世ギリシアのジブラルタル」として難攻不落を誇った。その上、地峡と本土に囲まれた良港があった。モネンヴァシアはペロポネネーソス東南端マレア岬の北へ約40キロに位置するので、ホメーロスの時代より難所として知られるマレア岬附近を航行する船の避難港ともなった。またトルコに占領されるまではワインの輸出港であった。モネンヴァシア産のワインは、フランス人にはマルヴワジ (Malvoisie)、イタリア人にはマルヴァジーア (Malvasia) という名でよく知られていた。今日、葡萄樹はみられないが、エーゲ海のテラ島、キュプロス、シチリア、サルデーニャ、ポルトガルに移植された。⁽³⁰⁾ また12世紀末に、モネンヴァシアの船がアテネの外港ピラエウスに碇泊していたという記録もある。⁽³¹⁾ 一時は相当の商業活動をしていたことが窺われるのである。

このようにモネンヴァシアは地の利に恵まれていたので、ギリシアの最後の拠点となっていた。そこでギョーム・ドゥ・ヴィルアルドゥアンは、モレア軍の他にアテネ公ギュイ1世、エウボエアの3諸侯、ケファロニア伯マッテオ・オルシーニなどの援助を受け、さらにヴェネツィアのガレー船4艘によって海上封鎖をした。⁽⁸²⁾「モレア年代記」はその状態を「籠の中のナイトエンゲールのように」と述べている。⁽⁸³⁾飢えには勝つことができず、遂にモネンヴァシアは降服する。⁽⁸⁴⁾「モレア年代記」にはその年が記されていないが、1248年とする説が多い。

そして同年から翌1249年にかけての冬、ギョームはミストラ城の建設にとりかかった。⁽⁸⁵⁾スパルタの西南約5キロの位置にあるミストラは、タイゲートゥス山脈北部の一支脈で最高点621メートルに、ギョームの築いた城がある。この地が発展して一種の山岳都市になるのは、のちにギリシア人がミストラを手中にしてからであるが、急斜面に点在する宮殿、教会、家屋、塔、市壁などの遺蹟は、正に「ビュザンティオンのポンペイ」という呼称にふさわしい景観である。⁽⁸⁶⁾町は上部と下部に分かれる。上の都市は上層階級の区域で、市壁に囲まれている。北門をナウプリア門、南門をモネンヴァシア門という。デスポテースの宮殿は特にきわだった建造物であり、数少ないビュザンティオン世俗建築の遺構である。丸天井をもつ広間が印象的である。他に宮廷礼拝所である聖ソフィア教会（14世紀中頃）が、内部の装飾が現存しないとはいえ、美しい姿を見せている。町を離れて登っていくと、前記の城がある。中庭に2礼拝堂の遺址があるが、のちトルコ人はそれらを合して一つのモスクにした。このあたりから見るラコニア平原の眺望はすばらしい。

下の都市には教会建築、従って宗教美術が密集している。最北端にブロントキオン修道院と附属の2教会、即ちハギオイ・テオドリー教会（1290年～1295年の間）とアフエンティコ教会（1310年）、少し南へ下ると聖デメトリオス教会がある。後者は府主教ニケフォロス・モスコプロスによって建てられた。ほぼ中間の高所にパンタナッサ修道院（1365年建設、1447年奉献式）南端にペリブレプトス修道院（14世紀後半）があるが、両修道院に通じる道の途中にヨハネス・フランコプロスの館（15世紀）が見られる。彼はデスポテース、コンスタンティヌス（のち皇帝コンスタンティヌス11世）の大臣であり、パンタナッサ修道院を奉献した人であった。

G. A. Sotirou は、ミストラ美術にはビュザンティオン伝統芸術と西欧芸術の要素の複雑な融合が見られるという。⁽⁸⁷⁾彼によるとミストラのフレスコ画には三つの流派がある。最古のフレスコは聖デメトリオス教会のそれで、二つの流れがある。一はビュザンティオン美術の規範に従っている派であり、他は、より自由で、遠近画法の構成をもち、運動と表現力にみちている。後者の傾向は、ハギオイ・テオドリー教会とアフエンティコ教会のフレスコにも窺がわれる。第三の派はあまり大胆ではないが、より生気にみち、優雅、高貴、豊富な色彩を追究している。ペリブレプトス修道院に好例がある。さらにパンタナッサ修道院のフレスコには、絵画性と豊かな色彩が最高度にまでたかめられているという。

C. Diehlの次のコメントは示唆的である。

「ミストラのフレスコに対する興味はつきない。稀にみる装飾意識、比較できぬ色彩の輝き、華麗、運動、表現の追究。それらは時に稚拙さをともなうことがあるが、デッサンの欠点にもかかわらず、真の優雅、素朴な優しさ、男性的な美しさに到達している。ひとは聖デメトリオス教会のフレスコに向えば、ここでもアッシージの上の教会を飾る絵画を考えるのである。特にペリブレプトス修道院では、色彩は稀にみる華麗美の一例であり、同時に、デリケートで活力があり、豊かな柔軟性を見せている。ひとはそれらの作品の前で、15世紀前半のイタリアの巨匠たちを夢みるのである。ペリブレプトス修道院を飾ったビュザンティオンの芸術家は、一再ならずマンテーニャと接触をもっている。」

4

1258年8月ニカエア帝国の皇帝テオドロス2世ラスカリスが、7才のヨハネスを残して亡くなると、パライオロゴス家のミカエルが台頭してきた。彼はメガス・ドックス（大公）→デスポテース→皇帝というコースをたどり、同年クリスマスにヨハネスと同時に戴冠されたとおもわれる。

ニカエア帝国とエピロスのデスポテース国との宿命的な対決の時がやってきた。ギリシア人どうしの主導権をめぐる争いである。エピロスのミカエル2世（1230頃—1268頃）は娘ヘレネーをシチリアのマンフレッドに、もう一人の娘アンナをモレアのギョーム・ドゥ・ヴィルアルドゥアンにそれぞれ嫁がせて、ドイツ人騎士とモレア軍の応援を得た。ニカエア側は皇帝ミカエル8世（1259—1282）の弟ヨハネスを派遣し、両者は1259年7月末、西マケドニアのペラゴニア平野で対峙した。ところが、エピロス側に内紛が起こり、ミカエル2世は離脱、その子ニケフォロスは敵方に走った。結局ドイツ・フランス騎士団とニカエア軍との戦いになり、後者の勝利に終わったのである。マンフレッドの騎士団は降服、ギョーム・ドゥ・ヴィルアルドゥアンはカストリア附近で隠れていたが、発見され、捕虜となった。モレア全土の支配を達成してから程なく幽囚の身となったヴィルアルドゥアンにとって、ペラゴニアの戦いは生涯の曲り角となったといえる。彼は2年以上、捕虜になっていた。

1261年7月コンスタンティノーブルがミカエル8世の軍隊に占領され、ラテン帝国の滅亡、ビュザンティオン帝国の復活という事態となった。同年末、ヴィルアルドゥアンは、自分の築いた3要塞、即ちミストラ、モネンヴァシア、マイナをパライオロゴス朝に譲渡して自由の身となった。

ペロポンネーソス南部の中央の半島はタイナロン半島とよばれた。南端の岬は、古代はタイ

ナロン岬、今はマタパン岬とよばれており、海神ポセイドンの神殿があった。岬の東側を数キロ北上するとポルト・カイヨ湾がある。マイナはミストラに続いて、この湾の北に築かれた城⁽⁴³⁾であるが、今はわずかな遺蹟が見られるだけである。ミストラを頂点とし、マイナ、モネンヴァシアを底辺とする三角形が、ペロポネーソス再征服への足がかりとなった。

ヴィルアルドゥアンは1278年に亡くなるまで失地回復を試みるが成功しなかった。デスポテース国の創設は、1348年皇帝ヨハネス6世カンタクゼヌスによる次男マヌエルのミストラ派遣⁽⁴⁴⁾よりとされる。以後34年間、ここはカンタクゼヌス家の牙城となる。1382年パライオロゴス家がミストラを入手すると、その頃ようやく激しさを増したトルコの圧迫で、首都が衰退していくのに対し、こちらでは独自の発展をし、学問の面でも哲学者プレートーンを中心とする古代ギリシア精神の復活など、顕著な動きがあった。1460年トルコがミストラを占領して、すべてを無と帰せしめるが、それらについては、改めて述べよう。

(大学音楽学部 助教授)

註

- (1) イタリア・ルネサンスに関しては、何といても問題の出発点となったブルックハルトの著作より始めねばならない。Burckhardt, J., *Die Kultur der Renaissance in Italien*, Basel (1860)。邦訳もいくつかあるが、中央公論社から出ているものが、訳文、解説、註釈ともによく出来ている。ルネサンス時代よりの概念の変遷については、Ferguson, W. K., *The Renaissance in Historical Thought; Five Centuries of Interpretation*, Boston (1948)。Cf. Dannenfeldt, K. H., *The Renaissance: Medieval or Modern?*, Boston (1960)。Helton, T., *The Renaissance: A Reconsideration of the Theories and Interpretations of the Age*, Madison (1961)。Il Rinascimento: significato e limiti, atti del III convegno internazionale sul Rinascimento, Firenze (1953)。なお「12世紀のルネサンス」については Haskins, C. H., *The Renaissance of the Twelfth Century*, Cambridge (1927)。
- (2) Vasiliev, A. A., *History of the Byzantine Empire, 324—1453*, Madison (1952), 713—722。
- (3) Ibid., 713。
- (4) Halecki, O., *The Limits and Divisions of European History*, London (1950), 156。
- (5) Runciman, S., *The Last Byzantine Renaissance*, Cambridge (1970)。ビュザンティオンのイタリア・ルネサンスに対する貢献については Setton, K. M., “The Byzantine Background to the Italian Renaissance”, *The Proceedings of the American Philosophical Society*, 100 (1956), 1—76。
- (6) P. A. Underwood のモザイク、フレスコなどの復原に関する予備レポートが *Dumbarton Oaks Papers*, 9—10 (1956), 11 (1957), 12 (1958), 13 (1959) にある。また手ごろな画集としては、Grabar, A. e Velmans, T., *Mosaici e affreschi nella Kariye-Camii ad Istanbul*, Milano (1965) がある。
- (7) Ostrogorsky, G., *History of the Byzantine State*, tr. by J. Hussey, 2nd edition, Oxford (1968), 417。
- (8) Ibid., 424。
- (9) Setton, K. M., “The Latins in Greece and the Aegean from the Fourth Crusade to the End of the Middle Ages”, *Cambridge Medieval History*, 2nd edition, 4, part 1, Cambridge (1966),

391.

- (10) Cf. Longnon, J., *L' Empire latin de Constantinople et la principauté de Morée*, Paris (1949).
Bon, A., *La Morée franque. Recherches historiques, topographiques et archéologiques sur la principauté d'Achaïe (1204—1430)*, 2 vols., Paris (1969).
- (11) Boulanger, R., *Greece*, tr. by M. N. Clark and J. S. Hardman, Paris (1964), 531.
- (12) Caraci G., "Morea", *Enciclopedia italiana*, 23, Roma (1934), 809.
- (13) これはギリシア語版の翻訳で Marino Sanudo Torsello, *Istoria del Regno di Romania* の附録であった。刊本は Hopf, C., *Chroniques gréco-romanes inédites ou peu connues*, Berlin (1873), 414—468.
- (14) アラゴン語版の特色は、他の史料をも加えて歴史書にしようと試みていることである。1393年10月24日に完成したことが明記されている。写本は1880年 d'Osuma 公の図書館で発見され、次のタイトルで公刊された。 *Libro de los fechos et conquistas del principado de la Morea*, ed. A. Morel-Fatio, Geneva (1885).
- (15) Schmitt, J., *The Chronicle of Morea*, London (1904).
- (16) Ibid., xxxi.
- (17) Longnon, J., *Livre de la conquête de la princée de l'Amorée : Chronique de Morée (1204—1305)*, Paris (1911). lxxxiii-lxxxiv. Longnon は前掲1940年刊行の自著「ラテン帝国とモレア公国」p. 317において、イタリア語原本説を既定の事実として述べている。なおフランス語写本はブリュッセル王立図書館 No. 15702 である。タイトルにバルトロメオ・ギージ (Bartolomeo Ghisi) 所有の原本より要約したことが記されている。ギージあるいは彼のヴェネツィア人の家臣が「モレア年代記」の原本をイタリア語で書いたとするのが Longnon 説である。
- (18) Lurier, H. E., *Crusades as Conquerors : The Chronicle of Morea*, New York (1964).
- (19) Vasiliev, A. A., *op. cit.*, 707. なお Vasiliev は原本がギリシア語であったという意見を持っている。Ibid.
- (20) Ibid., 466—467. n. 264に関連文献がある。
- (21) Schmitt, J., *op. cit.*, lviii—lxvi.
- (22) Setton, K. M., in *C. M. H.*, 392.
- (23) モドン、コロンはともにペロポネネース西南端の要衝で、1205年にシャンブリットとヴィルアルドゥアンに占領された。しかし翌1206年ヴェネツィアがうばい、1209年の協定によってヴェネツィア領有が確定された。1500年にトルコが占領した。Cf. Boulanger, R., *op. cit.*, 487, 497.
- (24) Setton, K. M., in *C. M. H.*, 399.
- (25) "Despota," *Enciclopedia italiana*, 12, Roma (1931), 685.
- (26) Ostrogorsky, G., *op. cit.*, 432, n. 2, 527, n. 3. 従って、ミストラのデスポテースたちは、皇帝の縁者としてその称号を有したのであり、国家の元首たることを意識していなかったという。
- (27) Lurier, H. E., *op. cit.*, 14.
- (28) Miller, W., "Monemvasia," *Journal of Hellenic Studies*, 27 (1907), 229 にモネンヴァシアの遠景写真がある。また *Grecia (Guide Moderne Fodor)*, Firenze (1963) 228 の対面ページには、手前に絶壁とその上の教会、かなたに湾と本土を入れた写真がある。
- (29) この説に対して Zakythinos, D. A., *Le Despotat grec de Morée (1262—1460)*, 1, Paris (1932), 21 では肯定的、Miller, W., *op. cit.*, 229 では否定的である。
- (30) Boulanger, R., *op. cit.*, 474.
- (31) Zakythinos, D. A., *op. cit.*, 22.
- (32) Longnon, J., *L' Empire latin*……, 217. Lurier, H. E., *op. cit.*, 156.
- (33) Ibid.

- ③④ Zakythinos, D. A., *op. cit.*, 21. Longnon, J., *L'Empire latin*……, 217. Setton, K. M., in C. M. H., 399. なおモネンヴァシア攻略に関するその他の文献については Lurier, H. E., *op. cit.*, 157, n. 9.
- ③⑤ Setton, K. M., in C. M. H., 399.
- ③⑥ 地誌については Boulanger, R., *op. cit.*, 467—472. わが国の刊行物では、「世界の文化史蹟」, 11, ビザンティンの世界」東京（1969）の P. L. 66 にミストラの展望写真がある。なお Tarsouli, G., *Mystras-Sparta, Athens*（発行年記載なし）は、モノクロームの写真集であるが、解説とあいまってミストラの全貌をつかませてくれる。
- ③⑦ Sotirou, G. A., “Mistra,” *Enciclopedia italiana*, 23, Roma (1934), 458.
- ③⑧ Diehl, C., “L’empire byzantin sous les Paléologues,” *Études byzantines*, Paris (1905), 236—237.
- アッシジの上の教会の壁画とは、いうまでもなくジオットーにその大部分が帰せられている聖フランチェスコ伝のフレスコである。ペリブレプトス修道院の画家とマンテーニャとの接触があったらしいというのは、大胆な提言であるが、パドヴァのエレミターニ教会におけるマンテーニャのフレスコと関連性があるようにも感じられる。ジオットーとの関連では、聖デメトリオス教会のフレスコよりもアフエンティコ教会の殉教者群像（前掲「世界の文化史蹟」, 11）P. L. 69）に一脈通じるものがあると思われる。いずれにしても Diehl はビュザンティオン → イタリアの流れを指摘しているのである。Cf. Diehl, C., *Manuel d’art byzantin*, 2nd edition, 2, Paris (1926), 744—745, 751. Ibid., “Byzantine Civilization,” *Cambridge Medieval History*, 1st edition, 4, Cambridge (1927), 477.
- D. V. Ainalov は1916年の「14世紀のビュザンティオン絵画」において、Diehl の説には美術作品の直接的分析よりえた結論はないとし、コンスタンティノープルのカーリエ・ジャミとヴェネツィアのサンマルコのモザイクを比較した結果、初期イタリア・ルネサンスの風景画の様式の影響を認めた。彼によれば、14世紀のビュザンティオン絵画を純粹のビュザンティオン芸術と考えてはならない。それはイタリア絵画の新しい発展に過ぎない、しかしそのイタリア絵画も、より早期のビュザンティオン絵画に起源をもつ、かくしてヴェネツィアは、初期ルネサンス芸術より後期ビュザンティオン芸術への逆運動の仲介センターの一つであった。Cf. Vasiliev, A. A., *op. cit.*, 710. （これに対して V. Lazareff は、カーリエ・ジャミの様式の起源はヘレニズムの伝統にあるのであって、Ainalov のようにイタリアに関連づけることはできないと反論している。Cf. *Encyclopedia of World Art*, 2, London. [1960], 816) A. Grabar は「約50年前の14世紀のフレスコ画の発見が、パライオロゴス朝の『ルネサンス』、即ちラテン帝国による中断後の芸術の再生をあきらかにした。それが絵画とモザイクに限られるとはいえ、今日ではこの芸術的復活の特性についての疑いはありえない」とし、12世紀に写実性を見せ出したフレスコが、13世紀には自然の表現に著しい進歩をみせ、更にパライオロゴス朝の絵画はドラマと細部表現をもつ宗教連作や丘、建築物をもつ景色などの初期キリスト教美術の復活をもたらしたという。そして13世紀の絵画は、様式においては、より自然的、内容においては、より情緒的な芸術創造の方向に向っていたが、この動きはイタリアのドゥエチェント（1200年代）の芸術と通じるものがあり、両者の接触を否定することは困難であるという。Cf. Grabar, A., “Byzantine Architecture and Art,” *Cambridge Medieval History*, 2nd edition, 4, part 2, Cambridge (1967), 350—352.
- ③⑨ ミカエル 8 世の登極の日については諸説がある。Cf. Ostrogorsky, G., *op. cit.*, 447, n. 2. 通常ミカエルの統治年代は1259年より数えられる。
- ④⑩ 1258年ギョーム・ドゥ・ヴィルアルドゥアンとアンナが結婚。アンナは「トロイアのヘレネーの再来の如く美しかった」。Cf. Longnon, J., *L'Empire latin*……, 223. 1259年6月2日、南伊トラニでマンフレッドとヘレネーが結婚。Cf. Nicol, D. M., “The Fourth Crusade and the Greek and Latin Empires, 1204—61,” *Cambridge Medieval History*, 2nd edition, 4, part 1, Cambridge (1966), 325.
- ④⑪ Nicol, D. M., *op. cit.*, 325.

ミストラのデスポテース国について

- (42) Zakythinos, D. A., *op. cit.*, 19 では、歴史家パキュメレスを引用して、ゲラキ（古代のゲロントライ。スパルタ東南約40キロ）もビュザンティオン側に譲られたとしている。
- (43) Boulanger, R., *op. cit.*, 476.
- (44) Zakythinos, D. A., *op. cit.*, 94—95.



〔写真解説〕

写真の手前は現代のミストラの集落。その入口にビュザンティオン帝国最後の皇帝コンスタンティヌス十一世（一四四九—一四五三）への記念碑がある。背景の山にミストラの遺蹟があり、右手の小高い所に宮殿跡、上端にヴィルアルドゥアンの城の一部が見える。

コンスタンティヌスは一四〇四年皇帝マヌエル二世の四男として生れた。デスポテース国は一四〇七年より皇帝の次男テオドロス二世が統治していたが、一四二八年よりコンスタンティヌスと六男のトマスが来て共同統治を始めた。彼は勇気と活力にあふれた人で、一四三二年にはラテン人のアカイア公国を滅ぼし、一部のヴェネツィア領を除いて全ペロポネソスを手にした。更に中部ギリシアに進出して、一時はピンドゥス山脈方面まで征服した。正に新しいギリシアが生まれようとしていたが、結局、皇帝となってトルコの総攻撃により戦死した悲運の人であった。

（一九六七年八月八日筆者撮影）